

ペスタロッチにおける政治と教育（4）

大久保哲夫

1

ペスタロッチは、フランス革命を対象とした時代批判の書「然りか否か」（1793）のなかで、革命前後の混乱したヨーロッパ諸国が秩序を回復するためには、為政者の卓越した統治術以前に為政者や民衆の人間性の回復が急務の課題であることを説き、人間教育の方向を示した。ここから、ヨーロッパの指導的地位にあるひとびとが、さらにはペスタロッチ自身がこの課題と取りくむためには、ペスタロッチにとり、人間性そのものへの探究がより徹底的になされ、人間の本質が明確にされる必要があった。わたくしはここで、その代表的な著作として「人類の発展における自然の歩みについてのわたしの探究」“Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts.”（1799）（以下「探究」と略す）を手がかりとして、ペスタロッチの人間観にふれ、かれの政治思想の根底にある倫理性と、民衆教育の本質を明らかにしておきたい。

すでに考察してきたように、「隠者の夕暮」において美しく描かれたペスタロッチの人間観は、「リーンハルトとゲルトルート」ではむしろ逆に野蛮な動物的な側面の強調により転換を迫られ、その後の彼の思惟様式は「善」と「悪」、「高き自然」と「低き自然」という対極構造的人間把握の様相を示してきた。このような思惟様式はこの「探究」ではいっそう徹底され、人間の本性が「我欲」“Selbstsucht”と「好意」“Wohllwollen”の二系列において考察されている。それと同時に、ここでは「然りか否か」においてみられた歴史的な探究方法も採られ、それが人間存在の「自然状態」“Naturzustand”、「社会的状態」“Gesellschaftliches Zustand”、「道徳的状态」“Sittliches Zustand”と

いう、垂直的・発展的思惟様式として現われている。しかも人類のこの三つの状態は、歴史的発展概念であるとともに、人間の「嬰兒期」、「青年期」、「成人期」という成長概念でもある。もっとも、人間の二重的性格と三つの状態が厳密に関係づけられて述べられているのではなく、反覆の多い叙述のなかで両者は錯綜しており、それをここで詳細に分析する余裕はないので、まず彼の叙述の順序に従って「我欲」と「好意」の系列を簡単に紹介し、彼が人類の歴史とヨーロッパの現状をどのように受けとり、そこからどのような人間を理想として追求しているかという点に関して考察してみたい。

ペスタロッチは「我欲」の系列に、知識、取得、財産、社会的状態、権力、名誉、服従、支配、社会的権利、貴族、王権、自由、暴政、叛乱、国法の十五項目をあげているが、この順序はまた人類の共同生活の発展しゆく姿であるともみなすことができる。すなわち、ペスタロッチによれば、人間は知識の所有により他の動物から区別され、やがて経済的取得から財産が生じたときには人間は社会的状態に入っている。ペスタロッチは人間社会の成立を、自然人が生活の困窮に遭遇して他との共同生活により自己の生命維持を容易ならしめようとした点に求め、それゆえそれは相互の社会契約die gesellschaftliche Vertragによるものとみなしている。さて、社会的状態では人間は権力と名誉を求め、支配と服従の関係が生じるが、これらすべての背後には人間のもつ我欲が潜んでおり、ペスタロッチは「服従の基礎は自己配慮 Selbstsorgeである」(VIII. s. 55)と述べて、服従もまた自己の生命維持の手段^{注1}であると考えている。このような我欲より生ずる共同生活に対し、ペスタロッチは、各人が権利を尊重し義務を遂行することにより社会契約ほんらいの目的に帰り、社

会の秩序を維持するいわゆる社会的権利を必要としている。

ここまでは有史以前の原始共同体の叙述ともいふべきであり、「貴族」の項目より歴史的叙述が始まる。ペスタロッチは「然りか否か」におけると同じく、封建貴族社会では一定の財産と一定の権利が確保され、社会結合の目的が達成されていたという。しかし貴族は利己的になることによりやがて没落を招き、それに代って王侯と宮庭のユダヤ人、すなわち商業資本家に実権が移り、経済の発達と絶対主義国家の発達とによりいっそう社会の不正は増大した。王侯の正義はサンキュロットの自由や平等と同じく人間の動物的我欲にすぎない。こうしてペスタロッチはフランス革命のころを想起しつつ自由や暴政や叛乱について次のように語るのである。

すなわち、人間にはほんらい独立的 *selbständig* でありたいという要求があり、自然状態では自然的自由 *Naturfreiheit*、社会的状態ではその代償として市民的自由 *bürgerliche Freiheit* によって独立性を享受する。この独立というのは奉仕と支配の中間にあり、人類永遠の理想であるが、その実現は困難である。けれど人間には動物的我欲が支配的であり、たとえ文明化した政治においても、権力を濫用して市民の権利を圧迫する暴政は避けがたいからである。そのような暴政に耐えかねて民衆は叛乱を起こすが、それも我欲から生ずるかぎり正当化することは許されない。しかし、ペスタロッチは、それ以上に叛乱を惹起した権力者の恣意と不正、そのために陥る民衆の社会的正義に対する無関心、すなわち「放埒と弛緩」(VIII. s. 70) も忘れてはならないという。責任は支配者の側だけでなく民衆にもあり、ここに上からの好意のみでなく民衆の啓蒙が必要とされるのである。このような状態について、彼は「いまやいっさいの生命の歓喜は社会的状態の公的組織において坐礁しているように思える」(VIII. s. 72) と述べ、国法もまた社会的正義に合致していないことを強く主張する。

これに対し、「好意」の系列には好意と愛と

宗教があげられている。この三つは人間の内面において発展するものであり、しかも相互に密接に関連している。好意はほんらい動物的であり、それが高まって神の心 *Göttersinn* にまで至ったとき、真の愛となる。宗教もまた安楽に対する動物的傾向より生じ、高い価値に導かれ動物性を超克してゆくものである。いまその詳細を説明するのがわたくしの意図ではなく、問題は我欲とともに人間の本性をなす好意の系列にある真実の愛や宗教が、人間にとり必要不可欠な社会生活、国家生活において失われているという事実にある。「隠者の夕暮」や「リーンハルトとゲルトルート」に描かれた理想の世界は夢と消え、宗教は国家宗教 *Staatsreligion* として専制君主に独占されているのが現実である。^{注2} 存在するのはただ動物的我欲のみであり、権力の座にある貴族や王侯も、サンキュロットも商人も牧師も、すべては表面は美しい着物に覆われていようと我欲のみの生活にある。そのような国家の状態をペスタロッチは次のように描いている。

「自己自身に対してはいかなる正義も知らない権力の鎖に縛られ、人間はふたたびあらゆる救いなき状態、あらゆる墮落した自然状態の無感情へと沈みゆく。そのときサンキュロットの内的感情が一般的になることにより、国家の解体が近づく。それ以前に王は玉座にあって檜の木のごとく堅くなる。深き恐怖があたかも樹木なき山々の深き谷にある死せる自然のごとく、王冠のまわりをとりまく。そのとき、独身の僧侶や楽しみなき年輩の独身者たちが国家の最後の支えとなるが、やがて彼らも沈み果て、民衆は我儘な不正により作り育てあげたアナキーの不幸にあって、墓の中の死骸のごとく崩壊してゆくのである」。(VIII. s. 99)

それは滅亡してゆくヨーロッパの国家と民衆の姿であり、それをペスタロッチは終末論的 *eschatologisch* に描いているのである。

ここに、同時に救いの道が開ける。^{注3} それはこのような否定的状況をして発展への契機とみなす彼の弁証法的な思惟方法によるものである。彼は、人類の自然状態から社会的状態への移行^{注4}

を必然的なものとみなし、さらに人間を「偶然と自由との混合」“das Gemisch von Zufall und Freiheit” (VIII. s.107) として把握し、「人間は自己の意志により目あきにもなれば盲目にもなる。自由にもなれば奴隷にもなる。正直にもなれば悪漢にもなる」(VIII. s.113) と述べ、社会的状態を越えて向上する力を人間のうちに見いだしたのである。それが道徳的状态である。

ルソーは、「人間不平等起源論」において原始社会から専制政治に至る人間の理性と自由の歴史を描き、専制政治崩壊の彼方に再び理性による自由と平等の回復を予言し、さらに「社会契約論」で理性国家の理念^{注4}を述べたのであるが、ペスタロッチにおいては問題はむしろ内面的な道徳的なことがらとして論じられている。そのことを、次にわたくしは自然状態、社会的状態、道徳的状态の説明を通して考察したい。

〔注〕

1. 本論文の原典は、H. Pestalozzis gesammelte Werke in 10Bd., hrsg. v. E. Bosshart, E. Dejung, L. Kempfer u. H. Stettbacher. (1944-1947) による。
2. ペスタロッチにおける宗教と国家権力との分離の立場は、すでに「然りか否か」に示され、「探究」でもこのような思想から、国家権力が介入し、国民支配の道具と化した宗教を国家宗教として、国民ひとりひとりの個人の道徳性の表現としての国民宗教Nationalreligionと区別している。(VIII. s.327)
3. シェブランガーは、ペスタロッチのこのような叙述を「終末論的終結」と名づけている。E. Spranger; “Pestalozzis Nachforschungen.” (1935) 分析表参照。
4. ペスタロッチの「探究」の叙述が弁証法的 dialektisch であることは、ナトルプのすでに指摘するところである。人類発展の三つの状態の叙述に、われわれはヘーゲル的な意味での止揚 Aufheben をみることが出来る。P. Natorp; “Pestalozzi. Sein Leben und seine Ideen.” (1919) s. 52
5. ルソー「人間不平等起源論」本田・平岡訳(岩波文庫) p.116.
ルソーもまたエンゲルスが指摘するように弁証法的思惟法を採っており、上掲書がペスタロッチに直接の影響を与えたかは不明であるが、「探究」

はよく似た点が多い。

2

まず、自然状態についてペスタロッチは次のように述べている。「自然状態は、ことばの真の意味において最高度の動物的無邪気である。この状態における人間は、自己の本能により単純無邪気にあらゆる感覚的楽しみへと導かれる。純粹の本能の子 ein reines Kind seines Instinkt である」。(VIII. s.121) それはかのロマ書に描かれた墮落以前の第一のアダムの樂園や、ルソーの「黄金時代」“Page d'or”にも似た「善悪の彼岸にある」^{注1}“Jenseits-von-gut-und-böse-sein”人間の姿である。しかし人間は自然の暴威に逢い、そこに長く^{注1}とどまることはできない。感覚的楽しみを得るためには労苦や心配が必要となる。しかもペスタロッチは、人間が農耕生活に入り財産が生じたとき初めて社会的状態への移行を認め、それ以前の人間生活の無限に異なる段階を認め、それ以前の人間生活の無限に異なる段階をすべて^{注2}自然人と呼んでいる。しかしそのさい単純で無邪気な、本能のままの生活をしている自然人を「墮落しない自然人」“der unverdorbene Naturmenschen”と呼び、逆にそのような生活を失った自然人を「墮落した自然人」“der verdorbene Naturmenschen”と呼ぶ。

ところで、墮落しない自然人の時代は「嬰兒がこの世に生れ出る瞬間であり、この瞬間はすぐにすぎ去ってしまう」。(VIII. s.125)自然の手から生れ出たとき人間は全く無邪気であるが、やがてそれは失われてゆく。「われわれの本性の動物的墮落は、本能と動物的好意が無力で不安になり始めた点より起こる。したがって、動物的自然の墮落していないことは、本能や好意が未だ自己の内部で力を失い始めていない点において見いだせるであろう」。(VIII. s.126)そのような状態は人類の歴史に存在したという事実概念ではなく、無限の過去に向かって予感できるにすぎない。しかし、墮落以前の完全に無邪気な姿 das Bild der Unschuld は、たんに空想像であるのではなく、人間の根元的な姿として意味を

もつ。なぜならこのような人間像は、「わたしがそこに向う完全性への目標であり、わたしの道徳的状態の基礎となるもの」(VIII. s. 127)と述べられているように、人類発展の将来具現さるべき理想像でもある。ルソーと同じくペスタロッチにおいても、自然人はイデーとして描かれているのである。

しかしペスタロッチは「この無邪気の像はけっして社会的正義の基礎ではない」(VIII. s. 127)と述べ、当時ホップズやルソーが盛んに論じた「自然法」や「社会契約」に対し、それらは純粹無邪気な人間とは本質的に無関係であるという。なぜなら「正義」「Recht」という概念は「不正」「Unrecht」に苦しめられてこそ意識されるものであり、墮落以前の自然状態にはけっして存在しない。法はほんらい「われわれが危険を前にし、この世に正義が欠けしかも正義をわれわれの意志により作る力が自己のうちにであると認められた結果現われた」(VIII. s. 129)のであり、それが動物的好意を他に及ぼした方が自己保存 *Selbsterhaltung* に都合がよいという墮落した自然状態に発するかぎり、自然法と呼ぶことができる。同様に社会契約もまた、人間が意志により社会生活に持ち込んだものにほかならない。

このようなペスタロッチの思想は、ホップズのいう生命維持のための理性の所産としての自然法や、ルソーの自由意志による契約に近いものを感じさせる。

しかし、^{注3}ペスタロッチはまた、「われわれのいっさいの要求といっさいの責任のあいだの媒介概念、すなわち権利と義務に関するわれわれの観念が、われわれが認めうる最高貴のもの、最善のものと矛盾しない原則の上にあることを望む。われわれ自身のうちにあるこの意志が、われわれが自然法と称するものの源泉である」(VIII. s. 127~128)という。それは自然法のあるべき *sollen* 姿であり、ここに彼の法概念の二重性を知ることができる。すなわち、等しく不正の苦しみを感ずる、自己保存の衝動から同時に他に対し不正を犯す偽りの正義もあり、「不正の苦しみの感じが最も奥深いところで好意や完全性への努力と結びつく」(VIII. s. 130)純粹

の正義の生ずるばあいもある。ホップズやルソーでは法や契約の成立は同時に神聖なものとしたが、ペスタロッチはそれらの二重的性格をみたのである。それは彼のいう自然的正義や社会的正義や道徳的正義の相異といえるであろう。

^{注4}では社会的状態とは何か。「社会的状態は本質的には自然状態の制限において成立する」。(VIII. s. 131)自然状態における人間が墮落の一途をたどり、限界にきたとき、社会的状態の制限に服することにより自己を他より保護し、動物的自然性の要求をより確実に、より容易に、より十分に満たすために社会的状態へと移行するのである。しかし結果は逆で生活の重荷と社会の不平等により人間はいっそう苦しめられる。自然状態における単純な楽しみはもはやなく、人間は「望み待つ」「Hoffen und Harren」というはかない運命に置かれているのである。財産も取得も職業も政府も法律も、すべては失われた動物的満足回復するための人為的、間接的な手段であり、自己保存のための動物的力の代理にすぎない。社会的状態は、ペスタロッチによれば、自然状態からの必然的移行であるかぎり本質的には墮落した自然状態と異なるものではなく、ただ動物的要求を満足させる手段が間接化し、複雑化したにすぎないのである。

しかも、この手段の間接化、複雑化により障害がいつそう増大する。「学者は頭の前から足の先まで重々しそうな体となり、鍛冶屋は両足よりも手の方が強くなり、仕立屋は歩くときよろめき、農夫は牛のような足どりとなる」。(VIII. s. 133)社会生活の軛に縛られた人間は、身体的部分的使用により動物的調和を失い畸型化 *Verstümmelung* を来たすのである。さらにまたこうした自然的諸力の畸型化の結果、人間に偏屈と硬化が一般的となり、そこから党派心 *Esprit du Corps* という偏頗な感情が生じてくる。上は王侯から下は仕立屋に至るまで仲間と党派を組み、あらゆる策略をもって自己の地位と利益を擁護しようとする。このようにしてペスタロッチは、ホップズのかの叙

述にも似て、「社会的状態の本質は、墮落した自然状態^{注5}に始まり社会的状態においてたんに姿を変えただけの、万人の万人に対する戦い der Krieg aller gegen alle の連続である」(VIII. s.135)と述べている。しかも社会人は、自然人のように直接的な殺人はしなくても、心情の歪みと硬化によりいっそう悪辣なことをする。それをペスタロッチは、絶対専制政治を念頭におきつつ次のように述べている。

このような傾向は支配者に著しい。彼らは民衆に対して好意や信頼を欠き、冷酷な政治を行いながら、民衆に向かっては「民衆は(われわれを)信頼すべきだ。信頼なしにはいかなる政治も成立しない」(VIII. s.136)という。彼らは一方では好意や信頼を無視しつつ、他方ではそれらを賞賛することにより、自己の不正を隠蔽しているのである。しかもペスタロッチは「信頼は社会的状態の本質に当然不相応である」(VIII. s.138)と述べている。なぜなら社会的状態では支配者は我欲的動機から権力のみを求め、しかも世人はすべて権力を至上のものと神聖視しているからである。国家には欺瞞に満ちた崇高な目的が立てられ、ひとびとは「道徳や家庭の力や合法的権利を見せかけだけの公的な国家秩序の犠牲にしなければならず、……すべてが公人 öffentliche Menschen となり、私人 Privatismenschen はもはやいなくなる」。(VIII. s.141)このような現実では好意や信頼という私徳の実現は不可能である。ペスタロッチはこうした政治の出発点を「朕は国家なり」といったルイ14世に求め、そこでは「不法な権力が自己自身を掟であると信じ、ちょうど卵が鶏の体内にあるように、掟と法が自己のうちにありと妄想している」(VIII. s.142)と、鋭く批判しているのである。

これに対しペスタロッチは、社会的正義のあるべき姿を示して、社会的正義は「誠実と真理^{注6}を社会的に結合されたすべての人間の相互義務とする」(VIII. s.143)ものであり、「国家の独立を市民の独立の上に、国家の繁栄を市民の幸福の上に築く」(VIII. s.144)ことであると述べている。それは要するに国家における個人尊

重の立場を示すものであるが、社会的状態が墮落した自然状態からの移行過程であるかぎり、動物的我欲が暴威を振り社会的正義の実現は困難である。

社会的正義を実現する手段としてペスタロッチは教育をあげ、次のように述べている。「社会的正義と市民的独立は、本質的には、われわれの動物的本性の個人的要求を一般に阻止する市民の職業陶冶 Berufsbildung に基づく。しかし、この陶冶はわれわれの動物的本性の最も奥深い感情を社会的正義や社会的秩序のために変形し、不具にするものである」。(VIII. s.152)人間の本性を外から抑圧変形し、社会の秩序に適合させるこの教育は「リーन्हルトとゲルトルート」で述べられた学校教育の理念に近いものであるが、要するにそれは人間性に対する一種の欺瞞にすぎず、一時的な成果を得ても人間を永遠に安住させるものではない。「わたくしが地位や職業においてできるかぎりの者になり、わたくしの幸福が権利により確保されても……、わたしはそのとき心の底から満足しているだろうか。社会的正義はわたしを満足させないし社会的状態はわたしを完成しないのである」。(VIII. s. s.155~156)なぜなら社会的状態での正義の享受は動物的本性にとってはたんに見せかけにすぎず、事実上、「社会的状態は、動物的無邪気の根底である動物的諸力の調和を最も奥深いところで消滅し、それにより物動的喜悅の基礎をその本質において破壊しているのである」。(VIII. s.156)こうして、墮落以前の自然状態を理想とするペスタロッチは、必然的に社会的状態を否定しなければならないのである。

しかもそのさい、「わが動物的存在の最高の誇り、わが本能の純粋性、および本能の上に安住する動物的好意は、わが本性の最高の尊敬、すなわち自由な人間の意志とその意志の上に安住するわが本性の道徳的力に位置を譲らなければならない」(VIII. s.160)と述べられているように、社会的状態の否定は自然状態への復帰へと向かうのではなく、最高の道徳への向上を意味する。これをわれわれは弁証法的発展と呼ぶことが

できよう。しかもこのような発展を可能にする絶対者は、「わが本性に君臨する神」にはかならない。こうしてペスタロッチは、「隠者の夕暮」におけると同じく自己のうちに神を見出したのである。したがって、ペスタロッチにとり、道徳は自己の内面より生じ全く個人的なものである。しかもカントの影響を受けたペスタロッチは、道徳の叙述にあたり著しくカント倫理学への接近を示している。それは次のようなことばからも窺われる。

「わたしは、この世のいっさいの事物を動物的要求や社会的関係とは無関係に、ただわたしの内的醇化に寄与するという関係から考え、またこの観点においてのみ要求したり拒否したりする力を自己のうちに持っている。この力はわたしの本性の内奥において独立的であり、その本質はけっしてわたしの本性の何か他の力の結果ではない。それはわたしが存在するがゆえに存在し、それが存在するがゆえにわたしは存在する。それは、わたしがなすべきことをわたしの欲することの掟となすときにわたしは自己を完成する、という内在的な感情から生じる」。(VIII. s.170)

「わたしの本能がわたしを自然の作品 *Werk der Natur* とし、社会的状態がわたしを人類の作品 *Werk meines Geschlechts* とし、わたしの良心がわたしを自己自身の作品 *Werk meiner selbst* とする」。(VIII. s.194)「自己自身の作品として、わたしは道徳的力すなわち徳となる」。(VIII. s.194)

このようにペスタロッチは道徳的存在としての人間の独立性・自律性を説き、さらに「道徳は全く個人的でありけっして二人の間に成立するものではない」(VIII. s.171)とまで述べている。しかし、彼の思想が道徳人という理想像を以て完結しているのではなく、ここから彼固有の思想へと発展している点に注目すべきであろう。

〔注〕

1. F. Delekat ; "J. H. Pestalozzi". (1928) s. 201.
2. 自然状態から社会的状態への移行に関するペスタロッチの見解は数ヶ所に記述されているが、厳

密に定義づけられてはいない。例えば、共同作業と言語の発生 (VIII s.91), 権利・義務の関係 (VIII s.91), 農耕生活と私有財産 (VIII s.123) となっている。これを、人間の共同生活に不平等が生じ、権力的人間関係がみられるようになったとき、とみなしてよいと思う。

3. ホッブズ「リヴァイアサン」水田洋訳(岩波文庫) p.208. ルソー「社会契約論」桑原武夫・前川貞次郎共訳(岩波文庫) p.29.
4. "Recht"ということばには、「正義」、「権利」、「法」という訳語を適宜与えた。ペスタロッチは人間が墮落した自然状態にあるか、社会的状態にあるか道徳的状态にあるかにより、三種の異った "Recht" があると考え、前二者は誤りであるとする。
5. ホッブズ 前掲書 p.202.
ホッブズは万人が万人と争う自然状態を克服するため権力的な国家の成立を求めたが、ペスタロッチは社会的状態に人間の争う姿をみて、それを越えていこうとするのである。
6. ペスタロッチのことばをそのまま用いたが、〔注4〕で示したように社会的正義はほんらい一種の欺瞞であり、シュプランガーは「社会的正義」の代りに「合法的正義」"gesetzliches Recht" というべきだと述べている。(E. Spranger ; a. O. s. 15) 要するにここでは、道徳的正義の社会に実現された姿を意味する。
7. このようなペスタロッチの思想はナトルプに影響を与え、ナトルプも「社会的教育学」で同様の思想を展開している。P. Natorp ; "Sozialpädagogik" s. 100.

3

ペスタロッチのいう道徳的状态は、自然状態に発し社会的状態という「必要の害悪」"ein notwendiges Übel" を経て初めて可能とされるものであり、ここから彼は、感覚的楽しみ、社会的正義、道徳を人間成長における幼児期 *Kinderjahr*, 青年期 *Junglingsjahr*, 成人期 *Manneralter* に対応させ、これら三時期について考察している。幼児期は動物的無邪期に最も近く、感性的楽しみを唯一の目的とするが、快楽に度を過ぐしたり苦痛に逢ったりすると、そうした害悪を克服する力を必要とする。その力は子どもの楽しみ *Kinderlust* と大人の正義 *Mannsrecht* の中間の修業時代 *Lehrlingsjahr* において獲得されるものである。この時期は主人

Meister により生活を強制され、主人と契約関係を結び、ただやがて自由と独立の権利を与えられ幸福が訪れるであろうと望み、それに向かって努力を続ける時期である。無知で無力な修業時代には、人は真理の上ではなく見せかけの上に、正義の上ではなく正義の欠除の上に立ち、それを克服してこそ主人の真理 *Meisterwahrheit* や主人の正義 *Meisterrecht* に達することができるのである。しかも「幼児期の迷いと青年期における正義の欠除なしには努力への衝動と誠実への力が欠け、人は独立した真理や正義へと向上することはできない」(VIII. s.173) ということばに示されているように、幼児期と青年期は人間成長の不可避の過程であり、教育的にも重要な意味をもつ時期である。しかし特に注目すべきは、幼児期の迷いや青年期の強制の痕跡は成人に達しても完全に消え去らず、ペスタロッチが「大人の真理もけっして迷いから独立しておらず、それゆえ純粋の真理はありえない」(VIII. s.173)と述べている点にある。

この人間成長の三つの時期の関係は、同時に人類発展の三つの状態にも妥当する。今それをくり返し紹介する必要はないと思うので、次の一点のみ注目しよう。ペスタロッチによれば、道徳的な真理と正義はそれに先行する動物的要求および社会生活の軀の迷いや不正の経験の後に生じてくるのであるが、彼はまた、この迷いと不正の「印象は死ぬまでわたしのうちに消え去ることなく、それゆえわたしは純粋に道徳的ではない。つまり動物的本能や社会的関係から全く独立して感じ、考え、行為することができない」(VIII. s.175)と述べ、純粋の道徳が到達不能な人類永遠の理想であることを示している。したがって「純粋の道徳性 *reine Sittlichkeit* は、動物的、社会的、道徳的諸力を分離するのではなく、それらが内面において相互に織り込まれて現われるわたしの本性に対立している」(VIII. s.175)といえることができる。

これが現実の人間の姿であるといえるであろう。^{注2}では純粋道徳とはいかなるものであろうか。そこへ達するためには人間の現実が否定されなければならないであろうか。これらの疑問

に対し、ペスタロッチは「道徳の全き純粋性は、その出発点に向かわねばならない。それはいうまでもなく無邪気である」(VIII. s.177)と述べ、墮落以前の自然状態を人類の理想とし、さらに、現実の世界は動物的無邪気と道徳的完成との中間にあるという。中間的存在として、失われた無邪気を回復することなく、苦痛に満ちた人生を送りやがて死に至るのが人間の運命である。

このようにして道徳実現の場としての現実が否定されたとき、現実肯定への道が開けてくる。それをペスタロッチは「わたしの罪とわたしの墮落の本質を発展させることができたなら、そのときわたしは無邪気の本質を認識するであろう」(VIII. s.178)と述べる。火山の爆発した跡の廃虚の中から雄々しく新しい建設に立ちあがる人間のように「自己自身を墮落から回復しようとするわたしの力が、墮落の中で芽生えてくる」(VIII. s.178)のである。こうした自己回復の力、すなわち「われわれの隠蔽された自己への作用」(VIII. s.179)こそ道徳ほんらいの姿といえよう。換言すれば、動物的墮落の恐るべき結果を克服し、最高の価値へと自己を醇化しゆく努力そのものを道徳とみなすことができる。

それは「リーンハルトとゲルトルート」における宗教観や、「ニコロピウスへの手紙」の思想に既にみられたものに近い。したがって「探究」においても、「宗教がこの導きにとりわたしの本性に可能な最高の力である」(VIII. s.186)と述べられている。真の宗教は自然人の迷信でも社会人の国家宗教でもなく、「わたし自身の作品としての宗教がわたしたちを内的醇化に導く」(VIII. s.236)というように、個人のことがらであり、個人の内面性の向上を目的とするものである。それゆえペスタロッチは「宗教は道徳のことがらであるべきだ」(VIII. s.235)、「キリスト教は全く道徳である」(VIII. s.237)と述べて、宗教を道徳と同一視しているのである。

しかるに、宗教もまた本来快適性に対する動物的傾向の所産であり、動物性から発する宗教が人間の動物性を克服することは容易な技では

ない。そのことに関しペスタロッチは次のように述べている。「汝の本性の大胆な冒険、汝が感性的存在であるかぎり汝の外への死の跳躍 salto mortale、それを断絶と名づけよ、再生と名づけよ。それは精神をして肉体を支配させる汝の全存在の最高の努力である」。(VIII. s. 82) ペスタロッチにとり宗教は彼岸の世界への超越ではなく、超越への努力そのものである。しかも「この努力の靈感のうちに、人間は、感性的知覚の限界を越え想像力を高くして、彼の本性の動物心に対立する力を与える神の像を見出す」(VIII. s. 84) のである。人間が感性を越えて道徳に向かうその力は神より与えられたものであり、したがってわたしはその努力は他との関係を全く絶った孤立的、個人的な完成への努力ではなく、ペスタロッチのばあい隣人への愛こそ努力への最高の姿であるとみなしたい。

そのことと関連して、ペスタロッチによれば愛もまた好意という動物的本性に起源を有するものである。その動物本能的愛が真の愛となるのは、「確かな誠実という神の心にまで高まることができたときのみ」(VIII. s. 80) である。それはすべての人間に対する神の愛であり、人間は現世において自己の動物的我欲を制し、動物的好意を発展させてこのような真の愛にまで高まるように努力しなければならない。それが「探究」における宗教である。

「隠者の夕暮」では親子の間の本能的な愛が無媒介的に同時に神聖な愛とされたが、「探究」では愛は人間の自然状態に発し、それと連続しながら、宗教的な愛になるにはそれを越え飛躍しなければならぬのである。この宗教的愛への努力の力と導きは神より与えられるものであり、こうして最高の価値の光に照らされて人間の現実が道徳実現の場として肯定されるのである。

すなわち道徳についてのこのような見解から、ペスタロッチの道徳観は、純粹義務や断言命令という抽象的概念を道徳の基礎とするカント倫理学とは異ってくる。ペスタロッチによれば、道徳的行為は「動物的本性のすべての迷いから離脱しようとする真面目な努力をその基

礎とする」(VIII. s. 179) のであるが、その努力は、「わたしの道徳は、ほんらい自己を醇化しようとする純粹意志、一般的にいうなら、正しいことをしようとする純粹意志を、わたしの一定度の認識や一定状態の諸関係と結合する方法にほかならない」(VIII. s. 168) と述べられているように、自己の置かれている環境、境遇、地位、身分という個人的位置において他に対して向けられるものである。そして、このような個人と環境との近接関係を逆にして彼の環境論が示される。それは「自然がわたしの動物的存在を道徳的対象と結合することが近ければ近いほど、その動物的幸福と動物的苦痛がわたしにふれる点が多ければ多いほど、わたしはそこにますます多くの道徳への刺激と手段を見いだす。自然がわたしの動物的存在を道徳的対象から遠ざければ遠ざけるほど、このような刺激や動機や手段を見いだすことが少くなる」(VIII. s. 180) という道徳的陶冶の思想である。人的環境であれ、物的環境であれ、それが道徳的であるなら、その中に生存する個人が道徳へと向上する刺激や手段となるという思想は、「隠者の夕暮」や「リーンハルトとゲルトルート」にみられた環境教育より通じるものである。

人間の道徳性陶冶に対する環境の重視から、再び社会的状態がクローズアップされてくる。社会的状態は自然状態から発展した姿として否定されざるをえなかったが、道徳的状态の光に照らされたとき、「道徳性への一教育手段」“ein Mittel der Erziehung zur Sittlichkeit”^{注6} として重要な役割が与えられる。

ペスタロッチはその点に関し、「社会的な権利および義務が、われわれの個性と動物的に近い関係にある道徳的対象から発する程度に応じて、社会的状態はわれわれを実際に醇化する手段となる」(VIII. s. 183)、「社会的人間の道徳は、ある国の掟や習俗が、自然がわれわれに示す基準と純粹堅固に結合している程度に応じて純粹となる」(VIII. s. 183) などと述べ、権利や義務や法律を肯定してゆくのである。そのみでなく、「われわれの本性の内面醇化に努める高い立法が社会的状態ではぜひ必要である」(VIII

. s.188), 「国民道徳 Nationalitätlichkeitは常に暴威を正義に, 我欲を好意に服従させる立法の叙知の多少の結果である」(VIII. s.189)ということかばらもあきらかなように, 社会的状態の害悪を克服し国民を向上させる手段として, むしろ法律が要求されているのである。しかもそのさい, 彼の立法思想は啓蒙主義的自然法思想を基礎とするのではなく, その根底に国民道徳の向上という教育的精神を有する。

その本質はペスタロッチのばあい愛の精神であることはいままでのないが, わたしは特に隣人愛が祖国愛にまで拡大され, 立法と国民道徳の基礎に祖国愛が置かれている点についてふれておきたい。それは「祖国の困窮や祖国の歓喜への参与がわたしの道徳の基礎にとり好都合なのであり, 祖国の義務を思念することが道徳の基礎ではない」(VIII. s.191), 「ある国の立法が近くに立つすべての人々の血の団体や好意的関係と結びつけば結びつくほど, ……その国において, 内的醇化に重要な市民の情調が好都合となる」(VIII. s.188)ということばに示されている。もちろんそれは近代的なナショナリズムの思想ではなく, ペスタロッチの祖国スイスの伝統的精神であり, 荒廃した祖国の復興と繁栄を願う純粋な感情である。

〔注〕

1. シュプランガーは「探究」を“Meisterwahrheit”（「主の真理」）の書と呼び, 「探究」の中核思想をここに求めている。
E. Spranger ; “Pestalozzis Denkformen” (1947) s. 7. s. 15. u. s. 44.
2. F. Delekat ; a. a. O. s. 187.
3. これをシュプランガーは「探究」の基本的な原理として, 「連続性の原理」“Kontinuitätsprinzip”と名づける。このような思想により, ペスタロッチは「死の跳躍」, 彼岸への超越を容易に果たしえず, 彼の宗教観は動揺しているといえる。
E. Spranger; “Pestalozzis Nachforschungen” s. 12. u. s. 24.
; “Pestalozzis Denkformen” s. 52.
4. E. Spranger ; “Pestalozzis Nachforschungen” s. 11.

F. Delekat ; a. a. O. s. 212.

5. 拙稿「ペスタロッチにおける政治と教育(2)」島根大学論集(教育科学)第12号 p. 9. 注6.
6. A. Stein ; “Pestalozzi und Kantische Philosophie” (1927) s. 193.

4

以上のような環境思想と政治思想より, ペスタロッチの思想の帰結の一つとして, わたくしは, 教育と立法の重要性をあげておきたい。ペスタロッチは, 教育と立法について, 「教育と立法は, 動物的存在としての人間には動物的好意の維持により, 無力な子どもの無邪気な姿を眼前にいわば夢のように保たなければならない。それは社会的存在の人間には誠実と信頼により社会的信頼性を発展させなければならない。最後にそれは自己否定により, 無邪気の本質を自己のうちに回復し, 再び墮落することのない動物的状态におけると等しい平和で善良で好意的な被造物となる人間個々の力へと人間を向上させなければならない」(VIII. s.198)と述べている。ここに教育と立法の果たすべき役割が述べられている。そして, ペスタロッチのこのような叙述の中に, シュタインが指摘することく, 社会的状態において道徳を実現する手段として^{注1}, ペスタロッチが具体的には教育と立法を必要としているとみなすことができる。もちろんここでいう教育は教育的環境の意味が強く, 家庭と学校に通ずるものである。

しかし, そこには未だ「探究」独自の思想はみられない。ペスタロッチが「道徳の対象への動物的存在によりわたしは道徳的になるのではない。わたしは全くわたし自身により, わたしの個々の力により道徳的になるのである」(VIII. s. 186)と述べているように, 環境の作用はそれが道徳的なものであっても, あくまでも個人の道徳的発達への刺激であり手段であるにすぎない。人間は自己自身の力により道徳的となるのである。「道徳は個人にあっては, 彼の動物的存在の本質や社会的関係と内的に結合している。しかし道徳は本性上全くわたしの意志の自由 Freiheit meines Willens の上に安らう」。(VIII. s.

249)このような人間の主体性、自律性が「探究」において明確に把握されたのである。「リンハルトとゲルトルート」では環境の墮落による人間の墮落に対し、よい環境を以て人間を救済しようとしたけれども、そのような一面性が「探究」では克服されたのである。

それをペスタロッチは、「わたくしは間もなく知った。環境が人間を作ると。Die Umstände machen den Menschen. しかしわたしは同時に知った。人間が環境を作ると。Der Mensch macht die Umstände. 彼は自己の意志に従い自己自身を多様に導く力をうちに持つのである」(VIII. s.107)と述べている。環境によって形成される受動的な人間関係ではなく、自らの自由な意志によって環境を作り変えてゆく能動的な人間像がここで明確にされてゆくのである。

ここからまず、人間の本性に内在するこのような力を引き出す *herausholen*, あるいは覚醒する *erwecken* 作用としての教育 *Erziehung* が重要となってくる。デレカートの「隠者の夕暮」で述べた「内界と外界との相互作用」という思想がここに再び現われ、これがシュタ^{注2}ンツにおける孤児の教育の経験を経て、ブルクドルフ以後の基礎陶冶の方法 *Methoden der Elementarbildung*, すなわち子どもの内面の諸力を合自然的な基礎的教授方法により発展させ、多面的に独立的な人間を形成しようとする教授法へと発展していくのである。

そのことと関連して、ペスタロッチが嬰兒期を道徳の理想とし、道徳の根底に愛を考えているとき、やがて彼の教育思想が「隠者の夕暮」に述べられたような家庭教育の尊重を前面に出すことは予想されるし、例えば後の「純真者に訴える」においてもそのことは断言できる。彼の子どもに対する期待は「リンハルトとゲルトルート」においてもみられたが、この「探究」はいわば歴史哲学、政治啓学の書であり、国家と国民の現実に対する発言であった。それゆえ教育を中心としては論じられていないが、そ

れにもかかわらず全体を流れる思想の脈絡において家庭教育論を位置づけることは可能であるといえる。

さらに、ここに述べた思想を政治的、社会的現実の問題として考えるならば、フランス革命以前には上からの支配者の配慮による民衆救済を説いたペスタロッチも、革命を契機に支配者の善意にのみ訴えることの無益さを知り、いっそう民衆の個としての独立性を重視するに至ったとみなすことができる。彼が「探究」において、国民の権利の尊重や、経済的自立や、道徳的自律を説くとき、そのことは明白である。もちろん国民の政治的、経済的、道徳的独立を志向するばあい、それを可能とする何らかの手段が必要であり、そのために一方では教育が考えられているが、「探究」ではまた法律が重視され、立法者の叡知が要請されている。すなわちそこでいう道徳的人間像は、まず為政者に説かれているのである。「隠者の夕暮」で君主の親心を説いたペスタロッチは、「探究」においても支配者に「自己自身の作品」としての道徳的政治を説いており、そのかぎりでは依然として彼の支配者教育は続いているということが出来る。彼は何よりもまず支配者に墮落した現実を変革し、道徳的国家を創造する実践者であることを望んでいるのである。

最後に、「探究」は人類の問題を論じた書であると共に、ペスタロッチ自身の生き方への探究であったという点を付け加えておきたい。彼はみずからこの書を著して隣人愛と祖国愛の実践へと乗り出したのであった。1798年のスイス革命に刺激され、貧民教育と国民教育の実現を夢見たペスタロッチは、祖国復興の第一日に「わたしは教師になろう」^{注3}「Ich will Schulmeister werden」と叫び、希望に満ちて新しい人生へと出発したのであった。

(注)

1. A. Stein ; a. a. O. s. s. 192—193.
2. F. Delekat ; a. a. O. s. 122.
3. “Wie Gertrude ihr Kinder lehrt” [s. 56.